



乗合馬車が改良され<sup>4)</sup>、その時まで分離されていた社会の各階級が近づくことになる。まだ手探り状態だった最初のビール工場<sup>5)</sup>が設立される。小金を持っている連中はパリ小物を買いに走り、金持ちになる幻想を抱く。それは繁栄の時代であり、パリにおける世紀の最初だった。販路が開かれ、機械類が製造され、生産が増加し、資金が流通する。しかし、エトワール広場の凱旋門の中断された工事現場を前にして、給与半減<sup>6)</sup>の兵士たちがポケットに手をつっこんで立止まっていた。

国王は昔の宮廷の習慣に戻ろうとする片意地な欲求のため間もなく反感を買うようになる。彼は、ルイ 18 世が好人物振りを見せようと努力したのと同程度に、断固として絶対君主たらんという時代錯誤ぶりを示したのだった<sup>7)</sup>。彼の治世の間、新聞は検閲で追いつめられ、大学は弾圧される<sup>8)</sup>。貴族たちは恥知らずな特権を享受し、金持ちは 2 回の投票権を持った<sup>9)</sup>。シャルル 10 世は長子相續権<sup>10)</sup>を再建しようとした。極端な聖職者の擁護者だった彼は、一つがなければ生きていけないかのように、王座と祭壇の結合の勅令を発した<sup>11)</sup>。これらの嘘偽の見解に対し、ラムネー<sup>12)</sup>は大胆で猛烈な反論をするようになるが、これにラコルデール<sup>13)</sup>とモンタランベール<sup>14)</sup>もやがて賛成することになる。

反対勢力は増大する。苛められてきた自由の防衛者として人気者のフォワ將軍<sup>15)</sup>の葬儀の折に、市民たちがデモをした時の 1825 年から、すべてが変る。ラエネクを排除しレカミエ博士<sup>16)</sup>が任命されたので、コレージュ・ド・フランスで騒動が起きる。貴族院の反対を前にして、ヴィレール内閣は新聞抑圧の法案を取り下げざるを得なかった。この時パリ全市が 3 日間喜びで沸き返る。警察は歓喜のデモを容赦なく弾圧した。パリ市民と妥協しようと考えて、シャルル 10 世は、シャン・ド・マルス<sup>17)</sup>で、国民衛兵の大観兵式をしようと決意した。しかし数連隊は、植物園のキリンに見立てられている国王を、「大臣はやめさせろ！ イエズス会を打倒せよ！」の叫び声で迎えたのである。苛立った国王は、パリの国民衛兵部隊の解散を命じた。クー・デタは、パリのブルジョワたちを激怒させ、ブルボン王朝の崩壊をはやめる事になる。同年 (1827) 11 月、両院の解散は自由派に好都合な投票をもたらす。熱狂が騒々しく威示される。警察と民衆の間で衝突が生じる。サン・マルタン街<sup>18)</sup>、サン・ドニ街<sup>19)</sup>で、パリケードが構築される。軍隊は蜂起した人々に発砲し、彼らは短い流血の戦いの後に降伏する。憲章を保持する決意の内閣が任命され、平穏が戻った。しかし老王 (当時 70 歳) は旧制度の再建を頑強に願っていた。彼はすべてを細細と看視し、ヴィクトール・ユゴーを謁見しながらも、検閲で禁止された戯曲『マリオン・ドルム』*Marion Delorme*<sup>20)</sup>の上演を拒否した。ジュナル・デ・デバ紙の

編集者は、ポリニャック新内閣<sup>21)</sup>に反対する論説のため、10箇月の投獄を宣告された<sup>22)</sup>。

1830年7月26日、アルジェ占領の時、国王は議會を解散し、最も厳しい検閲制度を再建し、憲章を侵害し公共の自由を攻撃する勅令を發布して、選挙法のみならずすべての法律を改悪した<sup>23)</sup>。烈しい動揺がかくてパリに生じた。労働者たちは職場を放棄して街頭に繰り出した。「憲章萬歳！ 大臣どもくたばれ！」の叫びは到る所からあがった。3日後、人民が首都の支配者になっていた。

### 1830年の革命

何があったのか？

1830年7月27、28、29の「栄光の」3日間があったのである。これらの日々に、大革命の魂を再発見し、民衆は突然目覚めたのである。27日、パリは震動し始める。警察は敢然と新聞を発行しようとしている社屋に乱入する。呼び出された錠前師たちはドアをこじ開ける事を拒否する<sup>24)</sup>。小銃の最初の一発が発射される。バリケードが一つフランス座の広場に構築される。騎兵隊が攻撃する。しかしブルジョワたちも運動に参加する。三色旗が幾つかの地点に揚げられる。騒乱は拡大する。サント・ブーヴ<sup>25)</sup>の友人で詩人のジュスト・オリヴィエ<sup>26)</sup>は、自分の住んでいるオルフェーブル河岸<sup>27)</sup>の近くで多数の群衆が動きまわっているのを目撃する。「四方八方から時折り《憲章萬歳！ 大臣どもくたばれ！》の叫びやさまざまなざわめきや小銃の発射音が聞こえる。夜になると、パリにバリケードが林立する。

《敷石を！ 敷石を！

それで砦をつくれ、立ち上った兵士たちが  
攻撃を阻止するように。》」

28日朝、人々は武装する。ドーフィヌ・アーケード街<sup>28)</sup>で書店ジュベールが、オドレー・ピュイラヴォー代議士<sup>29)</sup>は自宅で、エチエンヌ・アラゴ<sup>30)</sup>はラ・ブルス広場<sup>31)</sup>で、民衆に武器を分配している。槍や棍棒で武装した一団がボン・ヌフを渡る。担架が通る。グラン・ゾーギュスタン河岸で烈しい銃撃。「自由萬歳！ 憲章萬歳！」と、制服でパリ市内に飛び出して来たポリテクニクの学生たちが絶叫する。一団の国民衛兵たちが彼らに合流する。市庁舎は攻防の舞台となり再度確保される。ティエールは活動を妨害しようとするが、広場を指揮するマルモン<sup>32)</sup>は包囲されてしまう。

29日、重要な新手の援軍が叛乱側に加わる。警官が警視庁を放棄したのである。別働隊は、スイス衛兵隊が防衛し愛国者たちが戦死しているルーヴル宮とチュイルリ宮に向った。

ウジェーヌ・ドラクロワ<sup>33)</sup>は、「民衆を導く自由の女神」*Liberté guidant le peuple*のため、この叛乱のスケッチをしている。間もなく、パリ全市に大群衆が現れる。仰天して、国王は法令を撤回した。余りにも遅すぎた！ブルボン家の王座は流血の中で転覆する。

数日後、完全な平穏と安全を回復したパリで、衆議院は絶対多数でオルレアン公爵<sup>34)</sup>を王座に登らせた。新王朝は、ラ・マルセイエーズで祝福される。当時の国民衛兵部隊の司令官ラ・ファイエットは、善良な王朝の新成立は「共和政の最善のもの」と見なした。

シャルル10世の時代、女性たちは帝政時代のようにもの憂く腰を振ってゆるやかに歩く事はもうしなくなった。お洒落な女性たちはウエストを締めつけ、柳腰になり、袖を前よりもさらに広くした。絹のブラウスが発売される。若い女性たちは目のつんだ薄いコットンのパンタロンを穿きはじめるが、それは刺繍でスカラップされ靴の上までさがっていた。ドイツの銀行家ジェームズ・ド・ロートシルド<sup>35)</sup>がショッセー・ダントン街<sup>36)</sup>の自邸の落成式のために開いたダンス・パーティーで、優雅な女性たちはこれみよがしに刺繍飾りを下までたらし身につけていたので、ワルツを踊る時に服の下からちらりと見えたのである。帽子はジェルメーヌ・ド・スタール風のターバンが愛用されたが、ロッシェニ作<sup>37)</sup>『ウィリアム・テル』*Guillaume Tell*<sup>38)</sup>が初めてオペラ座で上演された時(1829)は、ラ・ゲスラー<sup>39)</sup>風の広い罫のカブリオレ帽や縁無しのカック帽が流行した。金髪で青い瞳が愛好された。各種のスポーツ、ボクシング、乗馬が流行する。ガス燈が出現した都市において、オーストリー大使アボニー伯<sup>40)</sup>が通ってくるマルス嬢のアパートほど素敵なのはなかった。白大理石の神殿と大きな半透明のガラス窓、「それを通して一連の部屋や小部屋、ギャラリー、花で一杯の金色の青銅の花瓶などが見えるのである。」

男たちは顎下にひげを蓄え、シルク・ハットを被り、スー・ピエ(ズボンの先を靴の下から回して留める革紐)付きの長ズボンを穿いた。ネオゴシック様式が、ロマン派作家の出版者ランデュエル<sup>41)</sup>の装飾模様画家の吟遊詩人様式と共に出現する。本は「寺院風」à la cathédraleに製本される。家具類は黒い線を象眼したすっきりした色のものや、黄色い線を象眼した濃い茶系統のものになる。最も美しい家具はベランジュかヤコブ・デマルテールの作品である。ヴィクトール・ユゴーは新流派の有名な宣言をつけた『クロムウエ

ル』<sup>42)</sup> *Cromwell* を出版するが、彼らはアルスナル図書館長ノディエ<sup>43)</sup> の家に集まっていた。ポール・ルイ・クーリエ<sup>44)</sup> は『これぞ諷刺文』 *le Pamphlet des pamphlets* を出版する。ヴィニー<sup>45)</sup> は、やがてベルリオーズ<sup>46)</sup> にモンマルトルで会うのだが、そこから「巨大なるパリ、根源にして終末のパリ！　パリ、闇にして炎！」を眺めるのである。さらにハインリッヒ・ハイネ<sup>47)</sup>、ライン河の詩人は、パリ市民が勇敢にも火薬を敵に食らわせているのを見て叫んだ。「7月の聖なる日々よ！　あなた方の太陽はなんと美しいことか！　パリの人々はなんと偉大なのだろう。天空の高みからこの崇高な戦闘を眺められた神々は、賛嘆の叫びをかけられた。」

(続く)

パ リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XXII)

1) duchesse de Berry, 本名 Caroline Ferdinand Louise de Bourbon-Sicile (1798-1870) : ベリー公シャルル・フェルディナン ([XXI] の注 26 を参照) の妻, 父は両シチリア国王フランソワ I 世である。ベリー公は亡命先のロンドンでイギリス人女性エミー・ブラウンと結婚していたが, 2 人の娘を得た後に離婚, 身分にふさわしいカロリーヌと再婚したのである。彼女は夫との間に 1 男 3 女を得るが, 2 人の娘はいずれも夭折し, 娘と息子のみが生長した。夫が暗殺され (1820.2.13.), その 7 か月後に息子のアンリを出産 (1820.9.29.), この子は「奇蹟の子」Enfant du miracle と呼ばれ, 後のシャンボール公 (1820-1883) である。7 月革命に際してはこの子を王位につかせようと努力するが失敗, 義父シャルル 10 世と共に亡命するが, ブルボン王家再興を計ってフランスに密入国し, ルイ・フィリップ打倒の反乱を組織しようとした (1832.4.)。しかし彼女の呼びかけに応ずる者は少く, プロヴァンス, ヴァンデと転戦するが, 5 月 23 日ラ・ブエールの戦いで決定的な敗北を喫し, ナントに潜伏中を密告により逮捕され (1832.11.7.), プレー要塞に監禁された。懸賞金は 50 万フランだった。彼女はこの時妊娠しており, 拘留中に女の子を出産した (1833.5.)。彼女はイタリア人の Ettore Carlo Lucchesi-Palli 伯爵と秘密結婚をした, と告白したのである。このスキャンダルは正統王朝支持派に衝撃を与え, ルイ・フィリップは巧妙な宣伝により, ベリー公妃の政治的野望を粉碎してしまう。

2) esplanade des Invalides : アンヴァリッドのセーヌ川に面した広場で, 長さ 487 米, 幅 275 米の広大な広場, 1704 年から 20 年をかけロベール・ド・コットの設計により造成された。芝生を敷き, 長い方の両側に 3 列の並木を配した。1720 年に拡大され, 当時渡船場のあったセーヌ川まで延伸された。1804 年, ナポレオンがヴェネチアのサン・マルコ教会から掠奪してきたライオン像が広場の中央に据えられたが, 1815 年にオーストリー軍により奪回されてしまう。1821 年から 30 年をかけ, その跡に金色の鉛製の巨大な百合の花束とラ・ファイエットの胸像が設置されたが, 1840 年のナポレオンの遺骸の帰還の時に撤去された。ヴェルサイユ行きのアンバリッド駅は, 1900 年の万国博覧会に備えて建設されたものである。1946 年に改築されブルジュとオルリー空港行きの始発駅は, 廃線と共に長い間放置されていたが, 現在ではオルリー美術館に改造されている。

3) barrière du Trône : 現在の第 11 区と第 12 区にひろがるナシオン広場の前身で、パリからヴァンセンヌに行く街道の起点にあたる。Trône 即ち王座と呼ばれるのは、1660 年 8 月 26 日木曜日、ランスでの聖別式から帰還したルイ 14 世と王妃マリ・テレーズがパリに入城する時、市民たちが此処に王座を据え国王夫妻の到着を奉祝した事に由来する。コルベールはこの慶事を記念し凱旋門建設を立案し、高さも幅も 50 米の門の上にルイ 14 世の騎馬像を据える予定だった。1670 年 8 月 6 日に礎石が設置されたが、建設は中断、土台だけが放置された。トロヌ広場の入口を扼するトロヌ柵門は徴税請負人たちが密輸の脱税品を防止する目的で構築したもので、この両脇にルドゥーが 1787 年に重厚な柵門の四角の一辺が 14 米で高さ約 17 米の建物を建設した。彼はこの上に高さ 25 米の円柱を建てようとしたが、人々は 30.5 米のドーリヤ式円柱を建てるように要求した。1845 年にはエテックス作のサン・ルイ像とデュモン作のフィリップ・オーギュスト像が円柱の頂上に据えられた。1794 年 6 月 14 日から 7 月 27 日まで、国民公会によって此処にギロチンが設置され、6 週間の間に 1,306 名が処刑されたが、この数はバスチユン広場で 13 か月間に処刑された 1,120 名を遥かに上廻る数字である。大革命の間、この広場は「倒された王座」Trône-Renversé 広場と呼ばれ、旧名に復するのは、1805 年になってからである。ナシオン広場と命名されたのは、1880 年の革命記念日である。この広場では、毎年復活祭から 3 週間市場が開かれ、ライ麦と蜂蜜で作ったアニス入りのケーキのパン・デピスの市としても有名である。

4) Omnibus : 「乗合馬車」はかのバスカルが創案した運賃 5 スーの四輪馬車が最初といわれる。彼はこの計画をロアンヌ侯爵に伝え、侯爵が友人らとこの運行免許を所得したのが 1672 年である。同年 3 月 18 日に営業開始、許可された路線を定時運行した。但し兵士、小姓、従僕及びそれに類する職業の人間は乗合禁止の命令がパリ高等法院から出ていた。サン・タントワヌ城門からリュクサンブール行、ロワイヤル (現代のヴォージュ) 広場の向いのサン・タントワヌ街からサン・トノレ街のサン・ロック教会前行の 2 路線の他に、パリ市巡回馬車も運行された。金色の百合の花を散らした空色の乗合馬車には金モールの制服を着た馭者と多色の房飾りつけた鍔付き帽子を被った車掌が乗車して運行して、一時は可成りの人気を得たが、残念ながら乗客が減少して、1677 年には営業を停止してしまう。

乗合馬車の営業許可願いはその後何度か提出されたが、このような車輛が公道に停車しては交通妨害になる、との理由で警察は認可しなかった。しかしこの乗合馬車はナントと

ボルドーで既に営業しており、パリ警視庁が反対の理由に挙げていた交通渋滞は全く起していなかったのである。ナントでは1826年から、ボルドーではなんと1817年から運行されていたのである。かくて1828年1月30日、パリ警視庁長官 Belleyme 氏が、18路線に100台の乗合馬車の運行を許可するのである。ラテン語で「すべての人のために」を意味する乗合馬車 Omnibus は、まさしく時代にふさわしい民主的な乗物で、階級や身分に関係なく、運賃さえ払えば、すべての人が利用できたのである。最初の乗合馬車の会社を興したスタニスラス・ボードリはランクリ街に事業所を設立、1828年4月11日に最初の乗合馬車の運行を開始した。ペリー公妃が乗合馬車に乗れるかどうかの賭をし、彼女はこの賭に勝つべく断乎として乗合馬車に乗り込んだ事も評判になり、ボードリの会社は大成功で、半年の間に250万人が利用した。しかしこの巨利が呼び水となり、乗合馬車の会社が乱立したため、パリ県知事オスマンが会社を統合し路線を整理、「乗合馬車綜合会社」*Entreprise général des omnibus* を設立した(1855.2.12)。この間、車輻も大いに改良され乗り心地も良くなり大型化して乗員数も増加している。12人から18人、24人、26人と増え、1880年には40人乗りの大型馬車が出現するが、大きすぎて渋滞の原因になると非難された。しかし路面電車の出現により、更に「乗合自動車」バスが出現する(1906)に及んで、乗合馬車は、1913年1月11日に姿を消した。

5) brassage : ビール醸造工場。付属施設としてビールを飲ませ同時に食事もできる brasserie、現代の「ビヤホール」の前身が出現し、大いに繁昌した。ビールは葡萄が栽培できない地域、ヨーロッパではドイツ、北欧、ベルギー、オランダなどで、その地の産物である大麦とホップを原料として製造された。フランス語の「ビール」*bière* はドイツ語の *bier* からの派生語で、この事からもビールの本場がドイツである事が判明する。この *bier* の語源を辿ると、「私は飲む」という意味のサンスクリット語の *pirâmi*、ラテン語の同意語の *bibo* に行き着くそうである。北方民族で愛飲されたビールは、美味なワインを大量に生産できるフランスではあまり普及しなかったのも当然といえる。しかし時代が下るにつれ、隣国ドイツなどとの交流が増大すると、自然にビール愛飲者の数も増加し、大革命前には78人のビール醸造業者が製造許可を得ていたという。1292年の「タイユ税台帳」に37名のビール醸造業者が登録されているというから、本文の「最初の」云々と記述は不正確といえよう。ビールと食物を出すビヤホール「ブラスリー」は、特に1876年のパリ萬博の時に大盛況で、各国の民族衣裳に身を飾ったウエイトレスがお国の自慢のビールを提供して、多くの客を集めたという。その後もブラスリーは流行して繁昌を続け



るが、現在でも盛業中の有名店はパリ第6区のサン・ミシェル大通り151番地の「リップ」Lippe, 第14区モンパルナス大通り102番地の「ラ・クーポール」La Coupole などがあ  
る。

6) Demi-Salade : 1815年に王政復古政府によって休職処分になったナポレオン軍団の  
将校たちをさした。というのも、彼らは不本意な休職処分により、従来の給料の半額しか  
支給されなかったからである。約2万人の将校がこの冷遇に苦吟し、彼らは不満からしば  
しばナポレオン支持派の煽動者になったため、警察はこれらの危険分子を厳重に監視して  
いた。

7) シャルル10世の時代錯誤が最も極端に露呈したのが、1825年5月29日、ランス  
大聖堂で挙行した聖別式即ち戴冠式である。ランス大司教により聖油が国王に塗られ、地  
上における神の代理として教会により公認されるこの儀式は、正に王権神授説をそのまま  
実現したことになった。翌々日には、これも新国王が行う慈悲の慣例行事である瘰癧病患  
者を撫でる儀式まで執行したのである。これにはさすがの王党派の中でも良識派は呆れか  
えった。自分の手で戴冠したナポレオンの崇高な儀式に見比べて、時代錯誤ぶりのシャル  
ル10世の聖別式は甚だみすぼらしいもので、帰京した国王をパリ市民たちは冷笑を浮か  
べて迎えたのである。

8) 言論、出版の自由を弾圧しようとしたシャルル10世の7月法令は政府の御用新聞  
『モニター』 *Le Moniteur* に1830年7月26日に発表された。翌日、これに反対する  
ジャーナリストたちは『ナショナル』紙 *Le National* の事務局に集合し、不法なる法令  
には服従せず、新聞発行は続行する旨の宣言をティエールの編纂で発表し、断固戦う姿勢  
を示した。この宣言が7月革命の口火を切った。

大学を始めとする高等教育機関への干渉は、フレシス伯(1765-1841)が、1819年にパ  
リ司教総代理に就任し、シャルル10世の宮中司祭長となった時から顕著になる。キリス  
ト教信仰が学生たちに滲透普及する事を熱望していた彼は、国王の計いで1822年にパ  
リ大学総長に就任し、キリスト教普及のための計画を実行しようとしたが、エコル・ノル  
マルの学生を中心とした大学側から烈しい抵抗に会った。その報復として彼が打ち出した  
エコル・ノルマル廃校という処置は更に大きな反対を惹起したのである(1822.9.6.)。さら  
に10月12日、ヴィレル内閣を非難したとして、パリ大学の現代史の教授ギゾーの講  
義が中止させられる。学生たちに最も人気のあったこの名講義の禁止は、シャルル10  
世の反動教育策の見本として、大学関係者のみならず、多くの良識派からも批判された。ギ

ゾーのソルボンヌでの講義再開は、ヴィレール内閣退陣後に成立したマルチニャック内閣の成立（1828.1.5.）により実現し（4.18.），多く人が聴講に駆けつけた。ギゾーの他にも同じく罷免され大学を去っていたヴィクトール・クーザン（1792-1867）やアベル・ヴィルマン（1790-1870）らも講壇に復活した。

9）1825年4月27日，フランス大革命の時に財産を没収され売却されてしまった亡命貴族に対する賠償を行ういわゆる「10億フラン法」をヴィレール内閣は成立させた。大貴族たちは巨額な賠償金を得たが，大半の亡命貴族は僅かな額しかもらえず不満だった。実際にかかった金額は6億2千500万フランといわれる。また革命により土地を奪われた地主たちには，1790年の収入の20倍の額に等しい補償金が支給された。

1820年2月14日のベリー公暗殺事件を契機として，王党派の危機意識が昂じ，自由主義，革命思想を抑圧する反動的法案が可決される。3月28日は不審な危険分子を裁判無しで3か月間拘留できる警察新法が，3月31日には出版の自由を制限する事前検閲を復活させる法律を成立させた。更に新選挙法が制定される（6.12.）。1814年の憲章では，投票権は直接税300フランの納税者に，立候補権は同じく1,000フランの納税者のみに許された制限選挙だったが，改正は，258名の代議士は郡単位で選出されるが，他の172名は県単位で最も多く直接税を納めた人の1/4が選挙権を有して投票できるという，いわば高額所得者は投票権を2回行使できるというものである。いくなれば新しい金持貴族が誕生したのである。保守派王党派に有利なこの新選挙法により右派勢力が勝利し，223議席のうち187議席を獲得した。

10）長子相続権 *droit d'aînesse*：親が死亡した時，残された遺産を長男が他の弟や姉妹より多く，場合によっては全部を相続する権利で，古くは聖書の中のヤコブとエサウまで遡ることができよう。しかしこの権利はローマ人やゲルマン民族の間にはなかった。フランスでは封地の相続に関してこの権利が認められるのは，13世紀頃からという。公爵領から男爵領に至る貴族の領地と城館については，長男は領地の3分の2か半分，城館は最も良い所を相続していた。しかしこの長子相続権は，1790年3月15日付の法令と1791年4月8日付の法令により禁止されており，憲章もこの精神を受け継ぎ，均分相続を定めていた。シャルル10世の提案した「長子相続法案」は代議院では承認されたが，1826年4月7日貴族院で否決された。ヴィレールはイギリス風の貴族層の育成を目的に，300フラン以上の地租を納めている富裕な家族に長子権を認めるよう提案した。これに該当する家族は全国で8万しかいなかった。しかし貴族院は均分相続を認めている民法典を歪曲す

るものとして否決したのである。この決定はパリ市民に大歓迎され、お祝いのイリュミネーションが街を賑わした。

11) 瀆聖禁止令 *Loi du Sacrilège* : 1801年イエズス会士デルピュイによって結成された信徒組合「修道会」*Congrégation de la Sainte - Vierge* は帝政時代には禁止されていたが、1814年に王政復古と共に復活、過激王党派の貴族や裁判官なども会員になり、陰に陽に政府の活動に影響を与えている、と自由派から攻撃された。しかし実際の活動は「信仰の騎士」*Chevaliers de la Foi* という秘密結社でヴィレールと多くの議員や当然ながら聖職者も加わっていた。国王とキリスト教のため奉仕する事を任務とした彼らは、当時頻発していた教会の儀式的祭器の盗難防止のため、1825年4月20日に「瀆聖禁止令」を議会で承認させる事に成功したのである。この法案は犯人に対する有罪判決は無期懲役から最高刑は死刑で、刑の執行前に手首から手を斬り落とすという残酷なものだった。しかし、これはさすがに実施された事はないといわれる。同様な法律は旧制度時代にあったが、1789年に廃止されていた。それが復活するというので、王党派のシャトブリアンもその残酷さと時代錯誤ぶりに呆然としている。この法令は7月革命後の1830年10月11日に廃止された。

12) *Félicité Robert de Lamennais* (1782-1854) : ブルターニュのサン・マロのブルジョワの旧家に生れ、幼時に母を失い、虚弱だったため、何度も烈しい発作に見舞れ、不安で悲しく夢見がちな少年期を送った。大革命から精神的な動揺を蒙ったが、兄ジャン・マリ (1780-1860) が聖職者になったのを見て立ち直り、キリスト教信仰を自覚し、兄の手で初聖体を拝受し、兄に従う決心をした。1808年に下級聖職を受けて神学研究に没頭、ナポレオンの宗教政策に反対し、兄と協働し『フランスにおける教会の状況についての省察』*Réflexions sur l'état de l'Eglise en France* を発表 (1808)、ガリカニズムに対する闘争とウルトラモンタニズム信念を宣言した。1816年に司祭に任ぜられ『宗教に関する無関心論』*Essai sur l'indéfférence en matière de religion* (1817-23, 4巻) を発表、王政復古とカトリックの復権の時流にも乗って大成功を博した。人間と社会の幸福には宗教心が不可欠で、無関心は大きな災害を招く。宗教の最高権威のローマ教会はすべての真理の保管者で俗界のすべての権力は教会に従属する、と主張した。彼はガリカニズムの最大の敵となるのである。彼の周囲はラコルデル、モンタランベールなど弟子が参集した。しかし彼は社会改良の関心から、教会と政治は分立すべきで、宗教的権威から人民の主権は自由であるべきだと考えるようになる。1830年の7月革命以後は、この考えが更に鮮明化

し、信仰も教育、出版、結社も自由という基本原理に立つべきと主張する『未来』紙 *l'Avenir* を創刊した。しかしこの新聞はローマ教会の干渉により廃刊せざるを得なくなる (1831.11.15.)。人々の自由に奉仕するようカトリックも改革しなければならない、とするラムネーの主張はローマ法王グレゴリウム 16 世に非難された。これに対する激烈な反論『信者の言葉』 *Paroles d'un croyant* (1834.4.25) で自由と慈悲と博愛精神が世界を救うと強調、ローマ教会と決定的に対立し、彼は破門されてしまう。以後、彼は政界に進出し、教権の打倒、人民の政治的自由の確立を叫び、社会主義に傾斜して行き、1848 年には代議士に選出され極左派に属し熱弁をふるったが、1851 年 12 月 2 日のルイ・ナポレオンのクー・デタで引退を余儀なくされた。

13) Jean-Baptiste Henri Lacordaire (1802-1861) : 父は医者で、彼は法律を学び弁護士となるが、1824 年 5 月にサン・シュルピス神学校に入学、1827 年に司祭となり、アンリ 4 世校付司祭の時ラムネーを知り、カトリックと自由主義の結合を目指す彼の思想に共鳴、『未来』紙創刊に協力した。しかしローマ教会と対立するようになったラムネーから離れ、1832 年 8 月の法王教書 *Mirari Vos* に全面的に服従した。彼の素晴らしい雄弁の説教は高く買われ、全国各地で説教を行い、多大の感銘を与え「説教壇のロマン派」 *romantique de la chaire* と緋名された。ローマに赴き (1836)、ドミニコ会に入会 (1840)、帰国してフランスのドミニコ会を再興した (1843)。彼はナンシー、パリ、トゥールーズ、ディジョンなどにドミニコ会の修道院を創設している。

14) Charles Forbes, comte de Montalembert (1810-1870) : イギリスに亡命していた外交官を父に持ったため、ロンドンで生れた。9 歳の時に帰国しサント・バルブ校で勉強、アイルランド旅行中に同地のカトリック教徒の信仰と自由のための闘争に深い感銘を受けた。帰国後、ラムネーとラコルデルと共に「王座と祭壇の分離」を目標に『未来』紙を創刊した。しかし 1832 年のグレゴリウス 16 世の教書にラコルデルと共に服し、ラムネーと袂別する。父の死後、貴族院議員となり (1835)、法王至上権者にして自由主義的カトリック教徒として、宗教的自由、教育の自由、スイスのカトリック教徒の自由やポーランドの独立などについて雄弁をふるった。2 月革命後は立憲議会について立法議会の代議士となり、ルイ・ナポレオンのクー・デタは承認したが、すぐに反対派にまわった。『自由国家における自由教会』 *L'Eglise libre dans l'Etat libre* (1863) などの著書があり、ローマ法王の不謬性を批判している。

15) Max Sébastien Foy (1775-1825) : フランスの将軍、政治家。大革命の時に共和

政府軍に砲兵として入隊、モロー将軍の友人だったためナポレオンから白眼視されたが、スペイン戦役中サラマンカの戦い(1812.7.22)で敗走するフランス軍の殿軍として奮戦し、中將に昇進した。王政復古となりルイ 18 世からナントの歩兵部隊総監に任命されたが、百日天下の時ナポレオン軍に参加、ワーテルローで負傷した。第 2 次王政復古では陸軍から追放された。1819 年北仏エーヌ県選出の代議士となり、独立派の闘士として、出版の自由、個人の自由の擁護のため熱弁をふるい、国民的人気を得た。1825 年 11 月 31 日の彼の葬儀には 10 万人のパリ市民が参集し、2 重投票法の不正、10 億フラン賠償法の不当を烈しく攻撃したフォワ将軍の死を哀悼する葬列は、そのままヴィレール内閣に対する反対デモとなった。葬儀の後、遺族のために寄付金の募金が行われたが、フォワ将軍の人気にあやかろうとしたオルレアン公ルイ・フィリップはこの機会を逃さなかったのである。数週間で 100 万フランの寄付金が寄せられたのをみても、フォワ将軍の人气が偲ばれる。

16) Joseph Claude Anthelme Récamier (1774-1852) : フランスの名医。外科医のビシャ (1771-1802) と同僚だったが、徴用され共和国軍の衛生担当の軍医になった。帰国後パリ衛生学校に登録、1799 年に医学博士となる。1806 年オテル・ディユーの専属となる。医者になりたての頃から帝国貴族のある分派に所属し、王政復古になると必死に新政府に入り込もうと努力、痛ましくらしいの熱意で当時流行のローマ法王至上主義的理念を抱いた。その故もあってコレージュ・ド・フランスとパリ大学医学部の教授に任命された。これが不正人事と非難されたのである。1830 年の 7 月革命の時、彼は新政府への公式の忠節の誓を拒否したため、追放された。彼は優秀な医師で絶大な名声を享受していた。検視鏡 Spéculum の使用を最初に普及させたのも彼である。

17) Champ de Mars : Campus Martius は古代ローマの練兵及びスポーツに供された広場で軍神マルスの原が原義。パリのシャン・ド・マルスは第 7 区にある。1765 年当時、建築中だった士官学校に生徒の練兵場を建設しようとした時、この辺りはパリ市民に供給するための野菜畠で、16 世紀は葡萄畠であった。近衛部隊の観兵式場にも使用する事になったため、土地の凹凸をなくして平地にする必要から 28,000 立方メートルの土盛りをしなければならなかった。完成した練兵場の広場は、1 万名の歩兵が戦闘隊形を組むのに充分な広さに拡大された。周囲は大きな空濠がめぐらされ、5 つの小さな石橋がかかけられ、錬鉄製の観音開きの門と美しい柵がつけられた。練兵場の柵の内側は楡の並木で、外側は生垣が造成された。この美しい眺望を完成させたのが、1768 年から 1772 年にかけて建築さ

れた士官学校の建物で、セヌ川を背景にしてエッフェル塔の下から眺めると、広大な練兵場の果に聳えている。

フランス大革命以後、この練兵場は多くの催し物の会場になる。1790年7月14日の大革命1周年記念日は連盟祭としてパリ市民10萬が参加、国王一家も出席した。1791年7月17日、ルイ16世の退位と共和制の実現を求めたデモ隊に鎮圧に当たった国民衛兵部隊が発砲し、50名余の死者を出す惨事となった。1794年6月8日、人民の神の最高存在 Etre suprême の祭典が、国民公会の支配者ロベスピエールの主催により挙行された。この時が彼の権力の絶頂期を示していた。ナポレオンは、1804年11月10日、大軍団に鷲を飾った軍旗の授与式を盛大に挙行している。これに対抗して、ルイ18世がブルボン家の白旗を部隊に下賜した(1815)。そして1827年4月29日、自分の命令に従わない国民衛兵部隊の解散を命じたのである。シャン・ド・マルスは平和時にも当然利用され、特に万国博覧会(1867,1878,1889,1900,1937)の会場の一部に使用された。1889年の萬博の時に建造されたエッフェル塔がこの広場の不可欠の景観となっている。

18) rue Saint-Martin：第3区から第4区にのびる。ゲーヴル河岸からサン・ドニ大通りとサン・マルタン大通りを結ぶ長さ1420米、幅7米から37.5米に及ぶ通り。旧サン・マルタン・デ・シャン小修道院に至る道だったのでこの名がある。サン・ジャック街と共にパリで最も古い道だった。1851年に現在の姿になったが、古くはガロ・ロマン時代から既にあり、北部の辺境地方に通じる街道であった。この町の72番地で1808年5月22日に生れた詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルは、46年後の1856年1月26日早朝、近くの「古提灯町」rue la Vieille-Lanterne という貧民窟の一隅で縊死体となって発見されている。この場所はサラ・ベルナル劇場(パリ市立劇場)の舞台裏の辺りといわれる。

19) rue Saint-Denis：第1区から第2区にのびる通りで、ヴィクトリア大通りとボンヌ・ヌーヴェル大通り及びサン・ドニ大通りをつなぐ長さ1334米、幅13米から30米の通り。ローマ人の造成した道で、リュテシア(現在のシテ島)からサン・ドニを経て、ポントワーズ、ルアンに通じていた。サン・ドニ大聖堂の増築とその市街の発展に伴い、8世紀からこの街道は重要性を増してくる。またパリへの凱旋道路の役割を持つようになり、「王道」voie royale とも呼ばれた。パリ市への入城式典は豪華に挙行され、凱旋門が建設され、ワインや牛乳が公共の泉に満たされ、聖史劇が街々の辻で上演された。主な凱旋を記すと、1328年9月29日のフィリップ・ド・ヴァロワ、1360年5月10日のシャルル5世、1380年11月19日のシャルル6世、1437年11月12日のシャルル7世、1461年

8月31日のルイ11世, 1484年7月5日のシャルル8世, 1498年7月2日のルイ12世, 1515年2月25日のフランソワ1世, 1549年6月16日のアンリ2世, 1570年11月20日のシャルル9世, 1722年11月8日のルイ15世, 1814年5月3日のルイ18世, 最後は1824年9月27日のシャルル10世の入城式であった。

20) *Marion de Lorme*: ヴィクトール・ユゴー作の5幕韻文劇。1829年6月1日から書き始め, 6月30日に完成。ユゴーは7月9日にバルザック, デュマ・ペール, メリメ, ミュッセ, サント・ブーヴ, ヴィニーらの友人の前で朗読した。大好評だった作品に上演依頼は幾つかの劇場からきたが, ユゴーはコメディ・フランセーズにこの新作を渡した。ところが8月1日に検閲官シャルル・ブリフォアから内務大臣マルティニャック子爵(1778-1832)により上演禁止となった旨を伝えられる。8月7日, シャルル10世は親しくユゴーをサン・クルー宮に招いて弁明を聞くが, 作中の国王ルイ13世の扱いで互いの理解が得られなかった。シャルル10世は上演禁止の代償として, ユゴーに官職の提供や年金の増額を申し出たが, 彼は即座にこの提案を拒絶した。結局この作品はブルボン王朝が没落し, 7月王政となった1831年5月2日, ポルト・サン・マルタン座で初演され, 大成功をおさめた。主人公マリオンをマリ・ドルヴァルが演じ, これ以後, この役は彼女の当り芸の一つになった。

21) Auguste Jules Armand Marie, comte, 次に prince de Polignac (1780-1847): フランスの名家ポリニャック家は代々国王に忠誠を尽した王党派の一族で, 彼も兄アルマン(1771-1847)と共に王政復古に努力, ナポレオン打倒を計るカドゥーダルの陰謀に加担, 逮捕され2年の禁錮刑で投獄された。無期禁錮の兄と共に脱走に成功し(1813), 王弟アルトワ伯と合流する。王政復古になりフランス貴族に任ぜられた。教会の権益擁護に熱心で, ローマに派遣された時, 彼の日頃の献身を嘉して, ローマ法王ピオ7世によりローマ公 prince romain の称号を授与された(1820)。ロンドン駐在大使の時ギリシャ独立にイギリスと協同して援助をする事を約した。外務大臣(1829.8.8.)となり, 次に11月には穏健派のマルティニャックに代り, 新内閣を組織した。総理の彼が随一のウルトラである上に, 内相のラ・ブールドネ伯爵(1767-1839)もその反動的言動で有名であり, 陸相になったブルモン将軍(1773-1846)はワーテルローの前夜にナポレオンを裏切りブルボン家に走った人物として甚だ不評であった。いずれにしろこの新内閣の時代錯誤の反動的欠陥が, シャルル10世の7月法令の発布を推進し, ブルボン王朝滅亡の要因をつくりだしたのである。英国に亡命しようとしてノルマンディーのグランヴィルで逮捕され, 無期

禁錮の判決を下されてハム要塞に拘留されるが、1836年11月の大赦で釈放された。彼の功績はアルジェリア征服に成功し、アフリカにおけるフランス植民地の開拓に先鞭をつけたことであろう（1830.7.5.）。

22) 1829年8月26日、『デバ』紙の編集主幹エミールベルタン（1771-1842）がポリニャック内閣を批判した論説のため、禁錮6か月の判決を受けた（テキストの10か月は誤り）。しかし、控訴院は彼を無罪として釈放した。1830年4月3日には『グローブ』紙の編集主幹デュボワが禁錮4か月、同年4月4日には『ナショナル』紙の編集主幹ソートレが禁錮3か月に処せられている。またシャンソン作家ベランジェも1828年12月10日に9か月の禁錮刑を宣告され、翌29年9月29日にラ・フォルス刑務所から出所している。

23) ポリニャック内閣の保守反動性を改善すべく、議会は221名の議員の連名で国王に請願書を奉呈した。政府の政策と国民の要望は一致せねばならぬのに、それが無い現状は改革されねばならない、と請願書は言上している。議会はポリニャック内閣不信案を可決（3.18.）。国王はその翌日議会を閉会し、5月16日に議会を解散した。しかし6月23日から7月19日にかけて実施された選挙で、反政府派は221議席から274議席に躍進し過半数を獲得したのに対し、政府与党は145議席にすぎなかった。この結果にもシャルル10世はたじろがなかった。「ルイ16世は譲歩したが故に失敗した。私は（処刑場に向う）馬車に乗るより軍馬に乗る」と宣言し、憲章第14条の法令発布の大権を発動し、4つの法令に署名する。その日、1830年7月25日の日曜日は美しい晴天で、シャルル10世はサン・クルー宮で何の不安もなく署名したのだが、これが王朝滅亡の署名になるとは知る由もなかった。4つの法令は、議会の解散、出版の自由の禁止、選挙法改正法案と9月に選挙を実施する法令である。これが7月26日、『モニトゥール』紙に発表されるや、憲章を否定する反動立法として反政府各派を団結させ、内閣打倒、ブルボン王朝打倒の革命運動を誘発したのである。続く7月27日、28日、29日の「栄光の3日間」の市街戦の結果、ブルボン王朝は崩壊し、7月王政が成立する。

24) 自由派の各紙は、出版禁止の法令を無視し、7月27日も発行を続けた。『タン』紙の印刷所を臨検しようとした警察は、ドアを閉ざしていた錠前をあげようとして、徒刑囚の足に鎖をつける役目の錠前師を呼ばねばならなかった。しかし彼らの協力を得られないとみるや、警察はドアを破って乱入し、印刷機を破壊した。この暴挙に印刷工たちがストに突入し、これが契機となって反政府運動が拡大し、バリケードが出現するようになる。

25) Charles Augustin de Sainte-Beuve (1804-1869)：ブーローニュ・ジュール・メール



に生れる。父は税関吏で母は英仏混合の女性だった。医学を学んだが、『グローブ』の創刊と共に寄稿をして、文筆生活に入る。創刊者のデュボワが彼の高校時代の恩師という縁である。1827年1月、ユゴーの詩の批評を担当した縁で、ユゴーとその家族と親しくなるが、後にユゴー夫人アデルとの不倫からユゴーと絶交してしまう。ロマン派の文学グループ「セナークル」の一員となる。『16世紀フランス詩歌及び演劇の歴史的・批評的展望』*Tableau historique et critique de la poésie française et du théâtre française au XVI<sup>e</sup> siècle* を発表、プレイヤッド派の詩人を紹介、ユゴーらロマン派詩人に新しい詩のインスピレーションを与えた。彼は『ジョゼフ・ドルルム』*Joseph Delorme* (1829)をはじめ『慰め』*Les Consolations* (1830)、『8月の断想』*Pensées d'août* (1837)の詩集を発表した。作品として決して不出来なものではなかったが、友人ユゴーに比較すれば優劣の差は一目瞭然であり、彼は詩人たる事を諦め批評家としての大成を目指した。ローザンヌ大学での講義を集約した『ポール・ロワイヤル』*Port-Royal* (1840-59,全6編)とリエージュ大学の講義を綜括した『シャトーブリアンとその文学的流派』*Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire* (1861, 2巻)の纏った力作もあるが、彼のモラリストとしての人間精神の分析、繊細な心理的観察を示す批評家としての本領は、『コンスティテュシヨネル』紙などに連載した『月曜閑談』*Causeries du lundi* 及び『新月曜閑談』*Nouveaux lundis* (1851-70,全28巻)にあるといえよう。歴史上の人物から現代人まであらゆるジャンルの人々を取り上げ、性格、思想、作品を平易簡明なフランス語で綴り、読者を閑談の楽しみに引き込みながら、その深い洞察により多大の感動と興味を与えている。フランス批評史上の巨人として、詩人ユゴー、小説家バルザックと共に、19世紀フランス文学の偉大なる文学者との評価は定着している。

26) Juste Olivier (1807-1876) : スイスのヴォード県 Eysims 生れ。ローザンヌで初め神学を学んだが、間もなく文学と詩作へ転向、パリで発表した彼の詩は注目され有名になった。1830年に数か月パリに滞在し、この時の『日記』*Journal* が1951年に公刊され、7月革命の日々やサント・ブーヴ、ユゴー、ヴィニー、サン・シモン主義者たちとの交流を記して興味深い。1833年から45年までローザンヌ・アカデミーでスイス史を教えたが、政変でパリに亡命し、青年のための寄宿舎を経営した。1870年に帰国し、ジュネーヴで歿した。『スイス雑誌』*La Revue suisse* を編集、『両世界評論』誌の通信員として多くの歴史的論考を寄稿している。サント・ブーヴとは親友で、彼をローザンヌに招き、『ポール・ロワイヤル』の連続講義を実現させた。感受性豊かな彼はスイスの伝説と自然を歌っ

た優れた詩人でもあった。『国民史研究』 *Etudes d'histoire nationale*, 『夕べの唄』 *Chansons du soir* などの作品がある。

27) quai des Orfèvres : 第1区にあり, サン・ミシェル橋とポン・ヌフを結ぶ, 長さ366米, 幅13.5米から14米の河岸。この河岸の完成とパレ・ド・ジュスティス及びパリ警視庁の増築のため, イエルサレム街が消滅した。ポン・ヌフの架設工事と共に (1580), 河岸の改造工事も開始された。河岸の完成時に「オルフェーヴル」金銀細工河岸と命名されたのは, アンリ4世の時代から, 金銀細工師たちが店を出していたためであり, 彼らの商品はその質の高さで有名だった。

28) Passage Dauphine : 第6区にあり, ドーフィヌ街とマザリーヌ街をつなぐ, 長さ90米, 幅3.5米の通りで, 1825年の開業。20番地にフィリップ・オーギュストが築いた城壁の遺跡がある。

29) Pierre-François Audray de Puyraveau (1783-1852) : フランスの実業家, 政治家。1822年にロシュフォール地域の代議士に選出され, ブルボン家の最も激しい反対派として, 7月革命の時に大活躍をした。パリで大規模な運送業を営み, 彼の家は革命派の集会場となった。パリ市民に武器や食糧を配分し, 7月28日の夜から29日にかけて, ラ・ファイエットが国民衛兵司令官に着任した事を知らせるビラを張り, 市街戦の勝利後, ラ・ファイエットを市庁舎に導き, 彼自身も臨時委員会のメンバーになった。シャルル10世の7月法令撤回を伝えに来た使者に向って, 「遅すぎた!」 *Il est trop tard!* と叫んで追い返した人たちの一人となっている。ルイ・フィリップの時代も, 共和派として反政府側に立ち, 弾圧に屈しなかった。2月革命でルイ・フィリップ政府が倒れた後の最初の立法議会を, この労働士は最長老議長として運営した。シャラント県から選出された彼は左翼の穏健派だったが, ルイ・ナポレオンの反動性に反対し, 立法議会には選出されず, 未来の皇帝による自由の弾圧を嘆きつつ歿した。

30) Etienne Arago (1802-1892) : フランスの作家, 政治家。ヴォードヴィルなど約100篇を共作も含めて執筆している。代表作は『貴族たち』 *Les Aristocraties* (1847) である。ヴォードヴィル座の支配人になるが, 若い時から革命派の一員で, 1849年6月13日の暴動に参加して敗北, ベルギーに亡命した。10年間に及ぶ亡命生活の中でも執筆は続け, ブリュッセル, ロンドン, ジュネーヴなどで作品を出版している。1870年9月4日, 第2帝政の崩壊後に帰国, パリの区長, 美術学校古文書保管人 (1878), 次にリュクサンブール博物館長になった (1879)。

31) la place de la Bourse : 証券取引所 la Bourse がある同名の広場で、一辺約 124 米と 123 米のほぼ正方形のこの広場は第 2 区にある。昔はドミニコ会系のサン・トマ修道院があった。大革命により廃止され、建物は 1801 年と 1808 年の 2 度にわたり取壊され、その跡地に取引所の最初の建物が建築され、途中で資金難のため中断、起工の 1808 年から 19 年後の 1827 年に完成した。株式仲買人たちや関連する人たちが住み始め、19 世紀末頃は繁華街の一つになった。1898 年 11 月、この広場で営業していたレストラン・シャンポーでガス爆発があり、死者 1 名、負傷者 6 名を出した。

32) Auguste Louis Frédéric Viesse de Marmont, duc de Raguse (1774-1852) : 小貴族の家柄で父は軍人だった。トゥーロン港攻撃の時にナポレオンを知り、副官となり、エジプト遠征に同行し、ピラミッドの戦いで武勲を立てた。霧月 18 日のクー・デタに協力、マレンゴの戦いでまたまた軍功をあげた (1800)。しかし 1804 年の元帥昇進に洩れ、この事からナポレオンに恨みを抱くようになった。だがウルムの戦い (1805) でオーストリー軍を撃破、ダルマチア地方を征服、その功によりラグーズ公爵 (1808) となり、元帥に昇進した (1809)。ラグーズは現在のデュブロニクである。ポルトガルに派遣されたが、サラマンカ近郊の戦いでウェリントンに破れ重傷を負った。回復後はフランス軍のロシアからの撤退の援護を担当、連合軍の追撃をたびたび阻止し、本隊の安全を確保した。しかしこれ以上の抗戦が無意味な事を悟り、ジョゼフ・ボナパルトの許可を受け、ロシア皇帝アレクサンドル 1 世と交渉し、パリ開城の降伏文書に署名した。ナポレオンとの連絡がなかったため、皇帝の条件付き退位の決心を知らなかったマルモンが部隊をノルマンディーに移動させようとして、一部の士官の反抗に会い、これがアレクサンドル 1 世を硬化させ、ナポレオンに対する無条件退位要求となってしまう。部隊の移動や譲位の強制は、ナポレオンからみればマルモンの許し難い背信の裏切りに映じた。マルモンはローマ王の即位やマリア・ルイザの攝政就任を実現しようと努力したが無駄だった。「裏切り者」の汚名はその後の彼についてまわる。王政復古後、ルイ 18 世により貴族に任ぜられ近衛部隊の参謀総長になった。しかし王政復古時代には特別な働きはしなかった。1830 年 7 月の「栄光の 3 日間」の叛乱鎮圧に当たったが失敗、ブルボン王朝の崩壊に手を貸してしまった。シャルル 10 世と共に亡命、ヴェネチアで歿するが、ウィーン滞在中はナポレオンの遺児ライヒシュダット公と親交を結んでいる。彼はナポレオン麾下の将軍の中でも最も勇敢で武略に富んだ将軍だった。

33) Ferdinand Victor Eugène Delacroix (1798-1863) : フランスの画家。国民公会議

員で外交官のシャルル・ドラクロが父となっているが、実はいかのタレイランの子生児だという。美術学校に入学しゲランに学ぶが、古典派の画風をはやくから捨て、新しいロマン派の画家として画壇に登場する。1824年のサロンに出品した「シオの虐殺」*Scènes des massacres de Chio*の強烈な色彩と大胆な構図で注目を浴びた。彼は好んで戦闘、革命、殺人などの衝撃的な題材をとりあげた。「サルダナパールの死」*La Mort de Sardanapale* (1828)、「民衆を導く自由の女神」*La Liberté guidant le peuple* (1831)などがその好例である。またモロッコ、アルジェリアを旅行、「アルジェの女たち」*Les Femmes d'Alger* (1834)、「十字軍のコンスタンチノーブル入城」*L'Entrée des Croisés à Constantinople* (1841)などオリエンタリズム豊かな作品も残している。ロマン派の闘将として当時画壇の主流を占めていた古典派と敵対していたため、世評の割には冷遇され、アカデミー入りも1857年になってからだった。彼は、下院、ルーヴル美術館、サロン・シュルピス聖堂の装飾も手がけている。彼の『日記』*Journal* (1893-95, 3巻)は、深い哲学的省察と鋭利な批評を伝えている。当時は無名のマネやモネらに大きな影響を与えている。

34) ルイ・フィリップ1世 (1773-1850)：父はギロチンで処刑されたオルレアン公フィリップ・エガリテ、母はルイズ・マリ・アデライード・ド・ブルボンで、1773年10月6日、パリのパレ・ロワイヤルで生れた。最初はヴァロワ公、シャルトル公、最後にオルレアン公となる。ジャンリス夫人に厳格に育成された彼は、父と同じく、大革命初期には人民の友として熱烈に歓迎された。ジャコバン・クラブに入会した彼は、バルミーの戦い (1792.9.20.)、ジェマップの戦い (同.11.6.) に参加し勇敢に戦った。しかし大革命の過激化に伴い、ネールウィンデンの敗戦 (1793.3.18) を機に、反革命分子の嫌疑をかけられ、逮捕を逃れるため上官のデュムーリエと亡命した。彼は他の亡命貴族のように祖国と戦う事を拒否した。スイスで貧乏教師をした後、ハンブルグ、スカンディナヴィア諸国、アメリカなどを流浪 (1793-99)、やがてイギリスに定住した。1809年11月25日、両シチリア国王の王女マリ・アメリーと結婚、男5人、女3人の子宝に恵まれる。王政復古後に帰国するが百日天下の間に再度イギリスに亡命した。しかしルイ18世が彼の帰国を認めたのは、1817年になってからである。10億フラン賠償法で莫大な富を取り戻した彼は、パレ・ロワイヤルに君臨、冷却したブルボン王家に対する反感から、彼の邸は反政府分子の巣窟と化した。彼は政治家、経済界の大物、作家たちと広範囲の人脈を構築し、反政府新聞の『コンスティテュションネル』紙や『ナショナル』紙に財政的援助を行った。彼の人

望は高まり、大銀行家ラフィット、カジミール・ペリエ、ギゾー、ティエール、ペランジェ、ラ・ファイエットらが彼の野望達成のために働いた。シャルル 10 世の失政のため勃発した 7 月革命の時、ラ・ファイエットの巧妙な演出により、周囲から推戴される形で、8 月 7 日、「フランス人の王」として即位した。市民王の肩書で、彼の立場は左右に偏することなく「中庸」*juste-milieu* であった。当面の彼の敵は、ブルボン王朝を支持する正統王朝主義者、帝国の復活を夢想するナポレオン支持のボナパルティスト、大革命の理想の実現を熱望する共和派と社会主義者たちである。特に労働者を中心勢力とする彼らの反乱（1831 年のリヨン、1832 年と 34 年のパリ）には手を焼き、その鎮圧には武力を行使せざるを得なかった。また度重なる暗殺（7 回）はいずれも未遂に終わったが、市民王を徐々に保守反動化させた。なかでも 1835 年 8 月 28 日、7 月革命の記念日を祝ってバスチュー広場に行く国王一家を狙った暗殺は、失敗したが、ルイ・フィリップに深刻な心理的影響を与えた。コルシカ人の革命家ジュゼッペ・フィエスキ（1790-1836）が、タンブル大通り 50 番地の家の窓に仕掛けた「地獄の機械」*machine infernale* は、小銃 25 挺を一斉に発射し、18 人の死者と 23 名余の負傷者を出し、国王も額に擦り傷を負ったのである。これを口実に、政府は出版の自由を制限する法律を成立させ、共和派の活動を撃つした。ルイ・フィリップの対外政策は平和維持を目標にしたが、これはナポレオンの栄光の恍惚から完全に醒めていない国民には不評だった。アブデル・カデール（1807-1883）の頑強な抵抗を破り、アルジェリアの完全植民地化の実現も、彼の不人気を挽回できなかった。ティエールに交替したギゾーの頑迷な方針、特に選挙法改正への絶対反対が命取りになる。官吏でありながら代議士も兼任できる官吏代議士は、政府与党の重要なメンバーで、選挙区によると僅か 400 票程度で当選できたのである。この官吏代議士の廃止と、選挙権を得るための直接納税額を 200 フランから 100 フランに引き下げる提案も否決される（1847.3.26.）。もし引き下げても予想される選挙人数は倍の 40 万人にしかならなかったのである。ルイ・フィリップの 7 月王政時代を通じ、フランスの産業革命は進展し、工業的にも経済的にも社会は繁栄したが、階層の分裂が顕著になり、大富豪のブルジョワ層が出現した反面、極貧生活に喘ぐプロレタリアートが大都市、特にパリに発生、この社会問題の解決が急務となった。しかしギゾー内閣はこの難問に取り組む姿勢もなくまた能力もなかった。しかも国王は老い、かつての機略縦横の手腕を発揮し、人材を登用し、国政の革新を命ずる気力を喪失していた。老王にとって不幸だったのは、新しき王政を樹立するのではないかと期待されていた皇太子オルレアン公フェルディナンの馬車の事故による急死だった

(1842.7.13.)。反政府勢力は宴会に名を借りて、反政府集会を全国規模で展開する。ギゾーは宴会開催の禁止を命令する(1848.2.14.)。1月2日、コレージュ・ド・フランスでのミシュレの講義停止措置に憤激した学生約4,000人が4日後に抗議デモを行った。2月22日、ギゾーの禁令に反して、パリ12区の民衆は宴会を断行しデモに移った。鎮圧に当たる筈の国民衛兵もデモに合流、ルイ・フィリップの退陣を叫んだのである。国王は23日にギゾーを罷免するが、パリ市民の怒りはおさまらず、翌24日遂にルイ・フィリップは退位を宣言し、7月王政は終わった。バスチーユ広場からコンコルド広場までを埋めた大群衆は国王退位の報に歓喜し、暴徒はチュイルリ宮に乱入して掠奪をした。ルイ・フィリップの王位を孫のバリ伯に譲位する希望は議会が否認し、新政府は共和政を宣言し、3色旗を国旗に指定した。国王一家はイギリスに亡命、ルイ・フィリップと親交のあったヴィクトリア女王はクレアモントの邸宅を提供、ルイ・フィリップは2年後の1850年8月26日、同地で歿した。享年77歳だった。

35) James ou Jacob Rothschild (1792-1868)：ユダヤ人の国際的金融資本家マイヤー・ロートシルト(1743-1814)の5男で、パリに支店を開設(1817)、一族の財閥の発展に寄与した。彼は兄たちと同じくウェリントン将軍に軍資金を提供し、スペインにおけるナポレオン軍撃破に貢献した。1822年にパリ駐在オーストリー領事に任命された。彼はルイ18世、シャルル10世、ルイ・フィリップの銀行家となり、政権維持の資金面を援助した。公債の引受・発行業務において他の銀行を押え最有力の地位を確立、取引所投機、鉄道建設債の引受・発行業務も行った。経済力の増大と共に政界への影響力も決定的になった。しかし48年の2月革命以後はその地位が低下し、株式銀行の新設、工業金融が比重を増すにつれ、パリのロートシルト銀行の影響力は低下していった。

36) rue de la Chaussée-d'Antin：第9区にあり、カピュシーヌ大通りとイタリアン大通りをサン・ラザール街につなぐ、長さ578米、幅14米から20米まで広がる通り。昔はガイオン城門を経て近郊のポルシュロンとクリシーをつなぐ曲がりくねった小道だった。「アンタンの土手」Chaussée d'Antinの名の起源は、この道を通る土地の一部が湿地帯で、道を嵩上げて土手にしなければならなかったためと、大通りに出る出口近くに、ルイ14世の寵妃モンテスパン夫人の子供のアンタン公爵の邸があったためである。1816年にこの名が決定したが、それまで何度も名が変わった。この通りには名建築家の手により豪邸が次々と建設されて多くの有名人が住み、パリ社交界の中心の一つになった。エピネー夫人は5番地の邸に住みグリムやモーツァルトを招待、7番地のネケール邸では、ネケール

ル夫人がピュフォン、グリム、マルモンテルらの知識人を招待、彼女の娘、後のスタール夫人となるジュルメーヌはこの知的雰囲気の中で生長した。この邸は1798年頃にレカミエ夫人が購入、1808年頃まで、総裁政府時代(1795-99)を通じて、パリで最も有名なサロンを開いた。作曲家ロッシーニ(2番地)、ショパン(38番地)、ミラボー(42番地)、ガンベッタ(55番地)なども住んでいる。

37) Giacchino Antonio Rossini (1792-1868) : イタリアのオペラ作曲家。父も母も音楽家だったが下積みの人たちだった。彼は音楽の天賦の才に恵まれ、ボローニャでの学業を半ばで放擲し、18歳から作曲に専心、1813年に『タンクレディ』*Tancredi* をヴェネツィアで発表し最初の成功を得て、ナポリのサン・カルロ座の音楽指揮者に任ぜられた。1816年ローマのアルジャンティーノ座で上演した『セヴィーリャの理髪師』*Il Barbier de Sevilla* は初日は大失敗だったが、翌日からは大成功をおさめた。その後『オセロ』*Othello* (1816)、『シンデレラ』*Cendrillon* (1817) など発表、次第に名声があがり、ロンドンついでパリに招待され(1823)、後にパリに定住、イタリア座の支配人、王立音楽学校総監督に任命された。1829年8月3日、シラー原作をオペラ化した『ウイリアム・テル』*Guillaume Tell* をオペラ座で初演し大成功をおさめた。彼はこの傑作を最後に39年間のオペラ創作を止めてしまう。ボローニャ、フィレンツェと移住したあとパリに帰り、パッシーの自宅で歿した(1868.11.13.)。彼のオペラは精緻な技巧と天才のメロディーで青春の明朗闊達な感情を歌い上げ、今日でも絶大な人気を保っている。

38) *Guillaume Tell* : 13世紀末頃、スイスにいたという伝説的英雄。最初バラードに歌われ、1734年から36年にかけてJ.R.Iselinによって発表されたスイス民謡集の中に収録され、それを題材にしたシラーの創作で、この英雄が広く知られるようになった(1804)。弓の名人ウイリアム・テルが息子の頭に乘せたリングを射落すという有名な話は、スカンディナヴィアの説話に起源がある。オーストリーの圧政とその体现者である代官ゲスラーの暴虐に敢然と反抗するテルの姿に、パリ市民たちはルイ・フィリップの圧政に対する憤懣を投影し、暴君の最後を夢想したものと思われる。

39) 『ウイリアム・テル』に登場するオーストリーの暴虐な代官。

40) comte Antoine-Rodolphe d'Appony (1782-1852) : ハンガリーの旧家出身のオーストリー外交官。若年から老練な外交官として活躍、ローマ駐在大使(1824年まで)からロンドン駐在大使となるがすぐにパリ駐在大使に代り、1849年まで20年以上にわたりこの職にあった。彼は敏腕ぶりを発揮し、祖国の利益のため、フランス政府の外交方針に

その影響力を行使した。彼の妻もまた才艶でサロンを開きパリの上流社交界の人士を魅了、夫の任務達成に協力した。1827年1月24日、パリ着任挨拶のためのレセプション・パーティーを大使館で開催した時、招待した旧ナポレオン軍の将軍たちの称号を故意に呼ばず、単に名前と階級のみを取次ぎの従僕が紹介した。将軍たちはこの侮辱に憤然として直ちに退去した。因みに将軍たちはトラント公爵マクドナルド元帥、レッジオ公爵ウーディノ元帥、ダルマティア公爵スールト元帥、トレヴィス公爵モルティエ元帥の4名である。これはメッテルニヒの指令でオーストリー領とナポリ領の地名の爵位名を省略したのである。この無礼は翌日の新聞に掲載され、広く一般市民の怒りを誘発した。ユゴーは『ヴァンドーム広場の円柱に害するオード』*Ode à la Colonne de Vendôme* (2.9.) で、ナポレオンとその将兵の武勇を歌い、オーストリーの敗北を指摘し、喝采を博した。アポニー伯は愛国心を刺激してはいけないうという教訓を学んだのである。洒落な紳士だった彼は艶聞にも事かかず、多くの女性と関係を持ったが、マルス嬢はその一人であった。

41) Pierre-Eugène Renduel (1798-1873)：フランスの出版業者。1828年にランデュエル書店を創業し、主としてロマン派の作家の作品を出版した。1840年までに、ユゴー、ミュッセ、ゴーチエ、ノディエ、ハイネらの作品を世に送り、ロマン主義発展に寄与した。

42) *Cromwell*：ユゴー作の5幕韻文劇で、有名な序文をつけて、1827年12月5日に出版された。この戯曲は長すぎてユゴー在世中は上演されず、初演は1927年だった。この作品はその序文で有名である。約70頁に及ぶ長文の序文をユゴーは僅か数日で書いたといわれる。その主張は、スタール夫人、シュレーゲル、スタンダールらの主張に比較して特に独創性があるとは思えないが、その見事な文体により、ロマン主義の宣言書として評価されている。人類の発展と共に、文学は抒情詩、叙事詩と発展し、キリスト教により、霊魂と肉体の対立が生じた近代の文学はドラマである。悲劇、喜劇の総合としてのドラマこそ新時代の新しき演劇である。と主張する。三単一の法則の廃止、地方色と歴史の尊重、題材の自由を提唱、文体は柔軟な韻文、特にアレクサンドラン詩句の使用を主張している。この点が散文を提案したスタンダールとの相違で、小説家スタンダールと詩人ユゴーの本質的相違といえようか。

43) Charles Nodier (1780-1844)：ブザンソン生れの作家。ロマン派の先駆者、保護者。昆虫の触覚の研究からシェイクスピア研究まで広範な仕事をしている。オラトリオ会の教師をしていた父は、大革命勃発後にブザンソン市長、裁判所長になった。父の推挙で同市の図書館の司書補になったが、政治事件にまきこまれたため、父は彼をパリにやった。



首都では秘密結社に加入、ナポレオンを諷刺した『ラ・ナポレオーヌ』*La Napoléone* を発表 (1802) したため、警察の追及を受け、スイス、次にイリリアに亡命、レイバク市図書館司書の職を得た (1812)。この在任中、ドイツ文学が青年時代から彼の内にあったロマン主義的エクゾティスムと幻想文学の趣味を覚醒させたといわれる。これが彼の一連の傑作『ジャン・スボガール』*Jean Sbogar* (1818)、『吸血鬼』*Les Vampires* (1820)、『スマラ』*Smarra* (1821)、『トリルビー』*Trillby* (1822) を生むことになる。帝政崩壊後に帰国、『デバ』紙、『コチディエヌ』紙の記者となり、復帰したブルボン王朝を熱烈に擁護した。1824年にアルスナル図書館長に任命され、有名なサロンを開いて、特にロマン派の青年作家たちの交流に協力した ([XIX] の注 47 を参照)。『エルナニ』の成功と共に、ロマン派の指導者はユゴーに代ったが、彼の先駆者としての役割は大きかった。『パン屑の妖精』*La Fée aux miette* (1832) や『ブリスケの犬』*Chien de Brisquet* (1844) など優れたコントも発表、1833年にアカデミー入りを果たした。

44) Paul-Louis Courier (1772-1825) : 私生児として生れたが、父クーリエ・ド・メレに認知され、正規の教育をバリで受ける事ができ、特にギリシャ語習得に力を入れ、一流のギリシャ学者となった。1809年まで砲兵士官として勤務したが、戦争を嫌悪して辞任、その後は領地 Vézetz (アンドル・エ・ロワール県) に引退し、文筆生活に入った。イタリア旅行中、フィレンツェのロランティーヌ図書館でロンゴス Longos 作の『ダフニスとクロエ』*Poimentika ta kata Daphnin kai Chloèn* の稿本を発見 (1810)、これを訳して出版した。最初の皮肉な論文『ルヌアール氏への手紙』*Letter à M. Renouard* (1810) を発表して以来、『これぞ諷刺文』*Pamphlet des pamphlets* (1824) まで、一貫してブルボン家の復古王政を専ら嘲笑をもって攻撃し続けた。共和派でもナポレオン支持派でもなかった彼は、ブルジョワ的王朝の実現を願っていたらしい。気難かしい性格のため、召使いたちから嫌悪され、彼らの手にかかって暗殺されたといわれ、そのうちの一人はクーリエ夫人の情人だったという。

45) Alfred-Victor Vigny (1797-1863) : ロシュの零落した名門貴族の家に生れた。家門の慣いで軍人となり栄光を夢みて入隊するが、各地を転々とする間に軍隊生活の現実には幻滅して 1827 年に辞職し、本格的に文筆修業の生活に入った。歴史小説『サン・マール』*Cinq-Mars* (1826) や『古代・近代詩集』*Poèmes antiques et modernes* (1826) の成功と、なによりも 1825 年富裕なイギリス人女性リディア・バーンベリーとの結婚により生活の不安が無くなった事が、ヴィニーに文学に没頭する決心をさせた。シェイクスピア

の翻案劇『オテロまたはヴェニスのもる人』 *Othello ou le More de Venise* (1829), 『アンクル元帥夫人』 *La Maréchale d'Ancre* (1831), 小説『ステロ』 (1832), 『軍隊生活の屈従と偉大』 *Servitude et Grandeur militaires* (1835) と力作を世に問い、ラマルチース、ユゴー、ミュッセと並んでロマン派の4大詩人となった。なかでも『ステロ』の挿話を劇にした『チャタートン』 *Chatterton* (1835) は、マリ・ドルヴァルの主演で大成功をおさめた。しかし彼女との悲恋でヴィニーは深く傷つく事になる。これを転機に彼はパリを去り、メヌ・ジローの田舎に隠遁、いわゆる「象牙の塔」にこもり、孤高の生活に入った。この孤独と沈黙の生活から生れた死後出版の詩集『運命』 *Les Destinées* (1864) と『詩人の日記』 *Journal d'un poète* (1867) は、ヴィニーの詩精神の結晶として高く評価されている。彼の貴族としての自負とプライド、何物にも妥協しないストイシムスは、ロマン派の中でも独特な光彩を放っている。

46) Louis Hector Berlioz (1803-1869) : 父は富裕な医師。父の求めた医学を放棄し音楽に転向、パリ音楽院に入学したため送金を止められ苦学した。ベートーヴェンの作品に熱中、またロマン派の青年たちと交友した。何度かの失敗の後、1830年にローマ賞を獲得、「幻想交響曲」 *Symphonie fantastique* (1830) などで次第に有名になりイギリスの女優ハリエット・スミスソンと結婚し、生活のため『デバ』紙に音楽評論の記事を発表、オペラ全盛のパリ楽壇を批判し、本格的な音楽に対する興味と関心をパリ市民の間に啓発しようとした。人間の情熱、苦悩、絶望などをひたすら表現しようとしたベルリオズの音楽は、当時のフランスでは受容されなかったが中央ヨーロッパ、ロシア、そして特にドイツで歓迎された。リストやシューマンは彼を後援し、特にリストとは、1852年と55年の2度にわたりワイマールで演奏会を開催した。1856年にパリ音楽院に迎えられたが、コンセルヴァトワールの作曲科教授という彼の熱望していたポストには遂に就任できなかった。「ロメオとジュリエット」 *Roméo et Juliette* (1839), 「レクレイム」 *Requiem* (1837), 「ファウストの劫罪」 *La Damentation de Faust* (1846) などの作品があるが、音楽理論書や批評も残している。フランス・ロマン派音楽の先駆者であった。

47) Heinrich (本名 Harry) Heine (1797-1856) : デュッセルドルフの貧しいユダヤ商人の子として生れた。フランス占領時代のこの街で育ったため、ナポレオンとフランスに対する熱烈な賛美の念を心に刻んだ。銀行家で富裕な伯父ザロモンの下で商業見習いをしている間、伯父の娘たちに恋して失恋した。伯父の援助で、ボン、ゲッティンゲン、ベルリンなどの大学で学び、ヘーゲルの影響を受け、また、フーケ、シャミュソー、シュラ

イエルマッハー、フォフマンらのロマン派グループと交際した (1819-24)。その間に処女詩集『詩集』*Gedichte* (1822) を出版した。彼はドイツ社会に受け入れられるようにキリスト教に改宗、ゲッティンゲン大学で学位を取得し、大学に就職する希望を持ったが、これは伯父の娘テレゼへの失恋と同じく叶えられなかった。この苦悩を癒すべく、ハルツ地方、イギリス、イタリア各地を旅行し、創作の題材と靈感を得た。『旅の絵』*Reisebilder* (1826-31, 4巻) がそれで、この紀行文から美しい詩を創作している。『ハルツ紀行』*Die Harzreise* も詩の源泉となる。これまでの詩作品を総合した『歌の本』*Buch der Lieder* (1827) は平易な言葉で甘美な抒情を歌い、人間の感情の微細なニュアンスを繊細かつ適確に描いて、ドイツ詩壇に新風を吹き込んだのである。抒情詩人としての評価が定まった彼は、しかしながら反動的封建主義を痛烈に批判し攻撃する自由主義の信奉者になっていたのである。彼の思想形成に決定的な影響を与えたのは、1830年7月に勃発した7月革命である。ブルボン王朝を打倒し、大革命の理想を復活したかに見えたフランスの都パリに、彼は出発した。その大都会で、彼はサン・シモニズムや共産主義の洗礼を受ける。アンファンタンやマルクスとの交友は、彼に国際的思潮への開眼を迫るものだった。社会主義的見地から発表された論稿は祖国ドイツで革新的青年層の絶大な支持を得た。ガゼット・ダウグスブルグのバリ特派員、両世界評論の協力作家として、ロマン主義運動に参加し、フランスとドイツのロマン派の相互理解の上の最上の仲介者となった。『ロマン派』*Romantische Schule* (1836) などの作品は危険文書と判定され、ドイツ連邦会議はハイネの著書の発売禁止を決定した。これはメッテルニヒの反動政策にプロシヤ政府が追従した結果だった。このためハイネは生活が苦しくなるが、幸い翌36年からフランス政府が年金を支給する処置をとったので、苦境を脱することができた。彼は無智だが美人のマチルド (本名ウージェニー・ミラ, 1883年歿) と結婚、無頼な生活の末に脊髄病となり (1848年以來)、10年間寝たきりの生活の後、1856年2月17日死去した。享年59歳だった。作品はこの他に『譚詩集』*Romanzero* (1851)、『アッタ・トロール』*Atta Troll* (1843)、『ドイツ冬物語』*Deutschland, ein Wintermärchen* (1844) などがある。祖国ドイツを愛しつつも罵倒し、罵倒しながらも賛美したハイネは、『歌の本』一冊でもドイツ・ロマン派の最大の抒情詩人といえよう。

(続 く)

(追 記)

(1) 参考図書〔I〕の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照下さい。

(2) 前稿〔XXI〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p. 13. 最終行	}	肅清
p. 14. 上から 3 行目		
p. 14. 下から 8 行目		
p. 20. 上から 6 行目		逆らえず

— 2006.4.4 —